

艇上 パラ選手と心ひとつ



東京パラリンピックに向けて調整する混合かじりフォア日本代表の立田寛之（7月、長野県諏訪湖（守屋裕之撮影））

障がい者スポーツには、健常者がパラアスリートと力を合わせて限界に挑む種目がある。ボート「混合かじりフォア」（運動機能障害・視覚障害PR3）もその一つで、障害や性別の異なるこぎ手4人と、健常者のかじ取り役「コックス男女2人と、上下肢障害の男女2人がフィニッシュ

（舵手）が組む。24日に開幕する東京パラリンピックで日本代表のコックスを務める札幌出身の立田寛之（29）＝埼玉・戸田中央総合病院ク、石狩翔陽高出＝は「5人が支え合って戦う姿の魅力を伝えたい」と話す。直線2千メートルで競う混合かじりフォアは視覚障害の男女2人と、上下肢障害の男女2人がフィニッシュ

かじ取り役「1秒でも早く導く」

インを背にしてこぐ。ただ一人、コックスだけが進む方向を見て、かじを操り、こぐタイミングやペースを声で指示する。コックスは障害の有無や性別を問わない。

日本代表の4人のこぎ手は10〜40代で、競技歴が1年未満の選手もいる。障害は弱視が2人、左肘下まひ、右半身まひが各1人。こぐ力や技術、見える範囲、体の可動域が異なるためリズムが乱れやすく、コックスの力量が鍵を握る。

立田は石狩翔陽高で競技を始め、コックスとして日大、社会人で日本一となった。2017年には五輪種目の男子エイト日本代表に選ばれ、アジア選手権で銀メダルを獲得。東京五輪を目指したものの、日本はコックスが乗る種目に出場しない方針を決め、18年秋、パラに活動の場を移した。

「自分の経験値を上げるための手段」だったという思惑は練習を重ねるうちに消えた。まひの選手は動き

の制約の限界までこぐ。視覚障害のある選手は艇のわずかな傾きを全身の感覚を動員して対応する。「学ぶことが多く、この仲間と東京パラを目指したい」と思った」と立田は言う。

新型コロナウイルス禍も仲間と乗り越えた。感染防止のため水上練習が減るなか、オンラインで意思疎通を図りながらトレーニングを続けた。パラリンピックが延期され、こぎ手の1人がチームを離れたときには全員で選手を探した。6月の世界最終予選で敗れて窮地にも立ったが、国際パラリンピック委員会（IPC）の推薦枠で選出された。

最終予選の記録7分47秒90はパラリンピック出場12チームの持ちタイムで最も遅い。ただ、チームの意気は高い。「こぎ手は障害やコロナ禍にも向き合い、互いの苦手な部分を補い合っ

て戦ってきた。1秒でも早くゴールに導きたい」と立田は誓う。

（野口洸）